

浄業法師碑の研究

稻岡誓純

一、

善導大師に関する史料としては、数多くあるが、そのうち金石関係の史料としては、数種が存在する。まず、現在において重要とされている碑文は、

- ① 『大唐実際寺故寺主懷憚奉勅贈隆闡大法師碑銘並序』（『金石萃編』八十六）
 - ② 『河洛上都龍門之陽奉先寺大盧舍那仏像龕記』（『金石萃編』七十三）
 - ③ 『唐龍興大徳香積寺主浄業法師靈塔銘並序』（『金石萃編』七十五）
- の三碑が存在する。そのほか、
- ④ 『温国寺故大徳幽法師塔銘並序』（『金石萃編』八十二）
 - ⑤ 『光明寺慧了塔銘』（『金石萃編』五）
- などが存在している。

これらのほか、現存はしていないが、『寶刻叢編』巻七にいうところの「京兆金石録」によると、碑銘のみではあるが、

唐慈恩寺善導禪師塔碑 僧義成撰 李振方正書 永隆二年

唐慈恩寺善導和尚塔銘 僧志遇撰並書 大中五年

が、残っている。

こうした、善導大師関係の碑文については、常盤大定・関野貞両博士によつて『支那仏敎史蹟』と題して評解^①されて以来、岩井大慧博士が『日支仏敎史論攷』のなかの『善導伝の一考察』、さらに塚本善隆博士の『金石文に見えたる善導と道綽』などによつて取り扱つておられるのである。しかし、これらの諸先生がたは、善導大師の伝記史料としてそれぞれの碑文のうち、部分的に善導大師に関係するところのみを扱つておられるのであつて、それぞれの碑文自体を詳細に研究はなされていないのである。

しかし、善導大師一千三百年遠忌を縁として、大正大学の金子寛哉先生が、隆闡大法師碑・浄業法師碑・龍門の大盧舍那仏像の龕記の試訳をすでに発表されたのである。それぞれの碑文自体をテーマとして、また、試訳を試みられたことには、同感を覚えるが、実際に意味内容の詳細な研究でないように思われる。

よつて、いま一度、それぞれの碑文自体の一字一字を慎重に読解していき、そして、それぞれの内容が善導大師とどのような関係があるものかを探るといふ研究方法で、敢えて、私はここに浄業法師碑の解説を試みるのである。

(1)常盤大定・関野貞両博士は、明治三十九年から大正十三年に至る十九年の間に都合七回にわたり、中国各地を踏査し、『支那仏教史蹟』と題して評解されたのである。

(2)金子寛哉先生は、まず『日中浄土』第四号（一九八一）において、「唐隆闡大法師碑銘」試訳」として、発表され、同じく中国の孫浮生氏の「浄土源流善導大師香積寺攷」、「隆闡法師考察文」等を『中国浄土教論集』として編集されておられるなか、この隆法師碑を訳しておられる。また『奉先寺「盧舍那佛像龕記」について』（大正大学研究紀要第七十二輯）として、盧舍那佛像龕記を試訳され、さらに『浄業法師碑をめぐる』（戸松教授古稀記念『浄土教論集』）として浄業法師碑を試訳しておられる。

二、

①『大唐實際寺故寺主懷憚奉勅贈隆闡大法師碑銘並序』（『金石萃編』八十六）については、現在、中華人民共和国の西安の陝西省博物館（碑林）の第二室に陳列されており、字面は、縦約一六〇センチメートル・横八十五センチメートル、一行六十五字、三十四行の行書体で、行間には縦線が刻入され、総字数二二〇〇字近くの碑文である。また、この碑文は清代の王昶の『金石萃編』八十六に所収されている。

しかし、我々浄土教に携わっている者は、この碑文を善導大師との関わりをもつて取り扱っているが、『弇州山人統稿』巻第二には、

筆法は円微、王羲之の聖教序の影響が認められる。

といわれている。また、『石墨鐫華』巻第四には、

この碑は行書、聖敎序に源由し、婉媚にして、纏繞（つる草）のようである。

といわれているように、碑林に陳列されている理由は、唐代の行書の代表的なものであるからと思われる。

よつて、日本においては、塚田康信氏の『西安碑林の研究』には、

全体的には清澄で気品の高い格調美を展開し、行書の瀟洒美を逐っているようである。

といい、現代の中国においては、陝西省博物館より『西安碑林書法芸術』が、一九八三年一〇月に刊行され、その中に、

西安碑林に保存されている唐代の行書の名碑の一つ

として、写真入りで紹介されているのである。

②『河洛上都龍門之陽奉先寺大盧舍那仏像龕記』（『金石萃編』七十三）については、高宗皇帝・則天武后の発願によつて、洛陽の龍門に、大盧舍那仏を建立したときの造像銘である。そのなか、

奉勅檢校西京實際寺善道禪師

とあることから、善導大師が龍門の大盧舍那仏造立のための、檢校（監督）という職にあつたことを伝えているのである。しかし、この行跡は、善導大師の多くの伝記史料にはまったく見られないのである。したがつて、この龕記は、彼の貴重な行跡を伝えているのである。

さて、③『唐龍興大德香積寺主浄業法師靈塔銘並序』（『金石萃編』七十五）については、一九八六年八月に中国において『長安仏教研究叢書』として『香積寺』が刊行され、それには主要な三碑文（隆闡大師碑・浄業法師碑・龍門の大盧舎那仏像の龕記）が付録として収載された。また一九八六年六月には、陝西人民出版社より『西安碑林』が刊行され、その中の第五の塔銘・経幢・造象碑の項の塔銘の第三番目に浄業法師碑が「香積寺塔銘」として写真二枚を付して説明を加えられているのである。

さて、現在この浄業法師碑は、ここ数年より、西安碑林には存在するが、一般的には未整理のためみることが出来ないとされていたけれども、二、三年前より碑林で拓本が売られるようになり、前に述べた『西安碑林』においては、碑林五室の外東壁にあると述べているのである。しかも高さ六十八センチメートル、幅七十二センチメートルで、一行二十四字の総二十六字の楷書体で、周囲には花紋が施していると伝えているのである。さらに、『西安碑林』によると、もともと陝西省長安県の神禾原の香積寺内に存在していたが、解放後、西安碑林に入蔵されたのである。

四、

さて、『大唐龍興大徳香積寺主浄業法師靈塔銘並序』（『金石萃編』七十五）の解説を試みることにする。まず、本文を記し、そして訓読を試み、さらにその意味・内容という体裁で、抑えることにする。

《原文》

大唐龍興大徳香積寺主浄業法師靈塔銘並序、

正字^①畢彦雄文

《訓読》

大唐の龍興の大徳、香積寺主浄業法師の靈塔銘並びに序、

正字の畢彦雄の文

註

①正字 『旧唐書』卷四十四 職官志三、『新唐書』卷四十七 百官志二校書十人のなかの正字四人のこと

《原文》

禪月^①西隱、戒灯東焰。談真利俗、稀代稱賢。智炬增輝、法師一人^②矣。

《訓読》

禪月は西に隠れ、戒灯東に焰く。真を談じて俗を利す。稀代にして賢と稱す。智炬増輝するは、法師一人なり。

《文意》

禪月は西に隠れ、戒の灯しびは東にかがやく。真理を談じて俗人（衆生）を教化利益し、当世においては賢人と呼ばれ、智慧の炬火をますます輝かせるのは、浄業法師その人であろう。

註

① 禪月は西に隠れ、戒の灯しびは東にかがやく。真理を談じて俗人（衆生）を教化利益するとの類似の文が敦煌文書にある。と牧田諦亮博士は、「善導大師と中国浄土教」（『京都女子学園仏教文化研究所「研究紀要」』第十一号）にいわれている。

《原文》

法師諱象、字浄業、趙姓。族著^①天水。代家南陽、冠冕相輝、才名^②継美。因官徙属、今為京兆人也。父廸^③、天馬^④。

監。沈黙攸伝、安界適^①」務。時英間出。奔^②秦於儒門、從法化生。独鐘於^③釈子。法師即監之^④」仲子也。器宇恢^⑤疑、風儀宏偉。長河毓量、汪然括地之姿、秀岳標^⑥」形。峻矣。干天之氣。貽^⑦年慕法、弱冠辭榮。

《訓誥》

法師の諱は象、字は淨業、趙姓にして、族は天水に著る。代々、南陽に家し、冠冕相い輝き、才名美を継ぐ。官に因りて徒属し、今、京兆の人と為る。父は^⑧迪、天馬監なり。沈黙伝うる攸、安界務に適う。時英は間出す。奔秦儒門に於いて、法に從つて生を化す。独り釈子を鍾む。法師は即ち監の仲子なり。器宇は恢疑にして、風儀は宏偉なり。長河の毓くむ量は汪然として、地を括する姿は、岳より秀でて形を標す。峻なり。天を干す気なり。貽年にして法を慕い、弱冠にして榮を辞す。

《文意》

淨業法師の諱は象、字は淨業、趙姓にして、一族は天水（甘肅省）で名高かつた。代々、家は南陽（河南省）にあって、官職の家であり、家柄は光り輝いていた。才能や名声は受け継がれ、官に就くにしたがつて、現在は京兆（都）の人となつた。父は^⑧迪といい、天馬監という役人であり、あまり口数が多くなかつたと伝えるところであり、その任務は父の^⑨迪の性格に適っていた。当世においては、賢人はしばしば出るものである。彼の家は代々、儒者であつたが、父の^⑩迪は仏法に從つて衆生を教化し、ここにいたつて淨業が鐘^⑪まれたのである。（淨業）法師は即ち監の仲子（次男）であつた。その人柄は心が広く徳が高く、風彩はたいへん立派であつた。まるで長河の豊かな流れは大地を

たばね、その姿は高い山岳より秀でて、形はけわしく天を干すくらいに氣運であるくらいであった。浄業法師は髫年にして仏法を慕い、そして弱冠（二十歳）にして、娑婆の世界を辞して出家したのである。

註

- ①天水 甘肅省天水県
- ②南陽 河南省南陽
- ③京兆 長安のこと
- ④廸 廸の字であろう
- ⑤天馬監 天子の馬を監督する職位
- ⑥弈棗 代々の意 『新唐書』卷二〇一袁朗伝に卿忠〇とある。
- ⑦釈子 釈迦の教えを奉ずる子供の事
- ⑧恢疑 恢は志しが大きいこと、疑は徳が高く深識なこと
- ⑨髫年 童年の称である

《原文》

高宗忌辰、方階落彩、被緇七日、旋登法座、觀經・疑論、剖析玄微、^①念定生因、抑揚理要。法師夙棹玄津、早開靈鍵、入如来密藏、^②踐菩薩空門。凡所闡揚、無不悅可。歎未曾有。發菩提心、稟其婦^③戒者、日逾千計。法師博濟冥懷、沖用利物。嘗以大雄既没、法僧^④為本、每至元正創啓。周飾淨場、広延高僧、転読真誥、荐興勝会。^⑤法服精

解、受用道資、出於百品。預茲位者、応其成敎。所施之物、各發一願、願力宏博、量其志焉。風雨不已、廿餘載。菩薩以定慧」力、而大捨法財、此之謂也。無適非可、住必宮建、厥功居多、思力」如竭。

《訓詁》

高宗の忌辰に階にあたって落彩し、緇を被ること七日、旋と法座に登り、觀經・疑論は玄微を剖析し、念定を生因とし、理要を抑揚す。法師は夙に、玄津に棹し、早く靈鍵を開き、如来の密藏に入り、菩薩の空門を踐む。

凡そ闡揚する所、悦可せざること無し。未曾有なりと歎ず。菩提心を發こし、其の帰戒を稟ける者は、日に千計を逾ゆ。法師は博く冥懷を濟い、沖かに利物をもつてす。嘗て大雄、既に没するを以つて、法と僧を本とす。元正に至る毎に創啓す。浄場を周飾し、広く高僧を延べ、真話を転説し、荐りに勝会を興す。法服は精鮮にして、道資を受用し、百品を出す。茲の位に預かる者は、応に其の数を成すべし。施す所の物は、各々一願を發す。願力宏博にして、其の志を量らん。風雨已まざること二十餘載。菩薩定慧の力を以つて、法財を大捨するとは、此れ之れを謂うなり。適として可に非らざるは無く、住まれば必ず宮建す。厥の功、多きに居り、思うに力は竭くすが如し。

《文意》

浄業法師は高宗の忌辰の年（六八三）に陛下の御前で出家をし、黒衣を被着することはわずか七日間であつて、たちまち法座に登り、『觀無量寿經』・『釈浄土群疑論』の奥深い思想を理解したのである。念仏と禪定とを生因とし、その理の要を抑揚す。法師はつとに玄津（奥深い真理）に棹し、また早く靈鍵を開き、如来の密藏に入り、菩薩

の空門を実践したのである。そうして彼が闡揚する所は、教えを受けた人を悦ばせなかつたことはなかつた。まさしく未曾有のことであると歎じた。浄業法師の教えを受けて、菩提心を発こし、戒に帰する者は、一日に千人以上にも及んだ。法師は博く悩んでいる人たちを濟い、深くものを利益したのである。むかし、既に大雄（釈尊）は亡くなつておられるので、その法と僧とを本とし、毎年の正月ごとに法会を創啓したのである。それには道場を淨く莊嚴をかざり、高僧を招いてさかんに法会を開延したのである。そして『真誥』を転読したり、またその法服は精鮮にされ、道資を受用し、百品を出されたのである。この位に預かる者は、ちようど其の数を成したのである。施されたものには、各々一願を発し、その願力宏博にして、その志を量つたのである。こうした法会は二十餘年間続き、菩薩の定慧の力を以つて、法財を大捨すること、このことを謂うのである。さらに住むところが適當でなく、また良くなかつたならば、そういつたところを必ず營建したのである。こうした功德のあつた住まいは数多く、思うに全力をつくされたようであつた。

註

- ①高宗の忌辰 六八三年、高宗の崩御された年
- ②方階落彩 陛下の御前で出家すること
- ③緇を被る 黒衣をさること。僧侶の最低の位につくこと
- ④觀經・疑論 『觀無量壽經』・『釈淨土群疑論』のことと思われる。
- ⑤剖析玄微 奥深い真理を理解解決すること 玄微を元微とするは、避諱である
- ⑥踐 実践すること
- ⑦沖用利物 深く用いること、衆生救済のこと

⑧大雄 釈尊のこと

⑨真誥 『真誥』七篇 二十卷 梁の道士 陶弘景が編集した道敎上清派の中心經典

《原文》

粵延和元年、龍集壬子、而身見微疾、心清志凝。夫依風以興。隨煙而散。來既無所、去復何歸。夏六月十五日、誠誨門賢、端坐瞪視、念仏告滅。嗚呼。生歷五十有八。即以其年十月二十五日、陪窆于神禾原大善導闍梨域内、崇靈塔也。道俗闡湊、號惋盈衢。不可制止者、億百千矣。門人思頊等、乃追芳舊簡。摭美遺編、永言風軌、思崇前迹、空留鎖骨之形、敢勒銖衣之石。

《訓読》

粵に延和元年、龍集壬子の年にいたつて、身に微疾を見、心清く志凝す。夫れ風に依つて以つて興る。煙に随つて散ず。來ること既に所無く、去ること復た何ぞ歸せん。夏六月十五日、門賢に誠誨し、端坐瞪視して、念仏をして滅を告ぐ。嗚呼。生歷五十有八。即ち其の年の十月二十五日、神禾原の大善導闍梨域内に陪窆して、靈塔を崇くするなり。道俗は闡湊し、號惋衢に盈つ。制止すべからざる者、億百千なり。門人思頊等、乃ち舊簡を追芳し、美を摭い編を遺し、永く風軌を言え、思いは前迹を崇び、空しく鎖骨の形を留め、敢えて銖衣の石に勒す。

《文意》

こうして延和元年（七二二）、龍集壬子の年にいたって、浄業法師の身体に微疾があらわれたが、しかし、心は清く志ざしは凝らされていた。「このことは無常の風に依って興ることであり、また煙に隨がつて散ずることでもある。来るといふことはもう既に無く、去るといふことはどうして復た帰ろうとするのか、一人旅である。」夏六月十五日に、門人・賢人に誡誨したのである。その様子は端坐して眼を凝らされ、念仏をして入滅をつげられたのである。嗚呼。生歴五十有八。すなわち其の年の十月二十五日、神禾原の大善導闍梨域内に陪窆され、靈塔を崇くしたのである。その時、道俗の人と声はちまたにまでみち、それらを制止できない人々が非常に大勢いたのである。そこで門人の思頃等が、舊い書簡を探しだして、その中より美しいものを拾い遺して、永く浄業法師の風軌を賛たえ、その思いは前跡を崇んで、そしてあえて粗末な石に彫り遺したのである。

註

- ① 延和元年龍集壬子 七二二年
- ② 瞪視 瞪はみつめるの意
- ③ 陪窆于神禾原大善導闍梨域内、崇靈塔也 陪は土をもちあげ高くすることで、空はほうむること。大善導闍梨とは、いうまでもなく善導大師のことである。ここの読みに関しては後に述べる。
- ④ 闍湊 闍は滴のこと
- ⑤ 號惋盈衢 悲しみに歎いた人々が街中にあふれること
- ⑥ 門人思頃 不明なり
- ⑦ 摭美遺編 古い記載を探しその中より（浄業法師を）ほめたたえるものを拾い遺すこと

⑧鎖骨之形 鎖骨とは菩薩（肉体）のこと

⑨勒鉄衣之石 粗末な石に刻み遺すこと

《原文》

其銘曰、「仏日既隱、賢雲乃生。伝持正法、必寄時英^①。時英伊何、猗嗟、上人。捐驅利物、愛道忘身。磨而不礫^②、涅而不緇^③。博濟羣有、是真法師。定慧通悟、檀那上施。願力宏廣、成無住義。応真而來、代謝而往。哀哀門人、撫臂何仰。靈德若在、休風可想。敢勒遺鹿、銘徼泉壤。」^④
^⑤

開元十二年甲子之歲六月十五日建^⑥

《訓読》

其の銘曰く、仏日既に隠れ、賢雲乃ち生ず。伝持する正法、必ず時英に寄す。時英は伊何、猗嗟、上人のみと。軀を捐して物を利す、道を愛して身を忘る。磨て礫せず、涅して緇からず。博く羣有を濟うは、是れ真の法師なり。定慧通悟し、檀那は施を上る。願力は宏廣にして、無住義を成ず。真に応じて来たり、代謝して往く。哀哀の門人、臂を撫でて何ぞ仰ん。靈德若し在つて、休風想うべし。敢えて遺鹿を勒して、銘を泉壤に徼す。

開元十二年甲子之歲六月十五日に建つ

《文意》

其の銘にいう。「仏（釈尊）に加護された日々はすでに隠れたが、賢雲（浄業法師）がそこで生まれられたのである。法師が伝持された正法は、必ず時英に寄すものである。時英とはなんであろうか。猗嗟、上人（浄業法師）だけである。上人は軀を捐して衆生を利益された。また仏道を愛して自分の身を忘れられるほどであった。自分を磨いて磔しないで、また涅してくらくなかつた。このように博く羣有（衆生）を済われたことは、是れ眞の法師である。定と慧にも通悟され、檀那たちは布施をたてまつつた。法師の願力は宏廣であつて、無任義を成じた。眞に應じて生まれ来てたり、代謝して往かれるのである。悲嘆にくれた哀哀の門人たちは、臂を撫でてどうして法師を仰ごうとするか。もし法師の霊徳があつたならば、その無常の風が止むことを想うべきである。どうかして浄業法師の遺鹿を勤して、その銘をこの暝い世の中に徴し遺すものである。

開元十二年甲子の歲（七二四）六月十五日に建つ

註

- ①時英 その時代に秀いでたひと　ここでは浄業法師
 - ②磨而不磔　身をすりへらすこと
 - ③涅而不緇　暗く染まること
 - ④遺鹿　偉大なこと
 - ⑤銘徼泉壙　冥土の灯火にすること
- ⑥開元十二年甲子の歲六月十五日に建　七二四年であり、この年はちょうど浄業法師滅後二十二年目である。すなわち二十
三回忌の祥月祥当の命日である。

以上、『大唐龍興大徳、香積寺主浄業法師靈塔銘並序』すなわち、『浄業法師碑』を解説してきたわけであるが、全体の内容をここでまとめてみることにする。

浄業法師の諱は象、字は浄業、趙姓にして、一族は天水（甘肅省）で名高かつた。代々、家は南陽（河南省）にあつて、官職の家であり、家柄は光り輝いていた。才能や名声は受け継がれ、官に就くにしたがつて、現在は京兆（都）の人となつた。父は迪といい、天馬監という役人であり、彼の家は代々、儒者であつた。父の迪は仏法に従つて衆生を教化し、ここにいたつて浄業が鍾まれたのである。

（浄業）法師は監の仲子（次男）であつた。その人柄は心が広く徳が高く、風彩はたいへん立派であつた。法師は髫年にして仏法を慕い、そして弱冠（二十歳）にして、娑婆の世界を辞して出家したのである。

（浄業）法師は高宗の忌辰の年（六八三）に出家をし、黒衣を被着することは、わずか七日間であつて、たちまち法座に登り、『観無量寿經』・『釈浄土群疑論』の奥深い思想を理解したのである。そして（浄業）法師の教えを受けて、菩提心を発こし、戒に帰する者は、一日に千人以上にも及んだ。法師は博く悩んでいる人たちを濟い、深くものを利益したのである。また毎年の正月ごとに道場を浄く莊嚴をかざり、高僧を招いてさかんに法会を開延したのである。こうした法会は二十餘年間続き、菩薩の定慧の力を以つて、法財を大捨すること、このことを謂うのである。

さらに、延和元年（七一二）、龍集壬子の年にいたつて、（浄業）法師の身体に微疾があらわれ、夏六月十五日に、門人・賢人に誠誨されたのである。その様子は、端坐して眼を凝らし、念仏をして入滅されたのである。ちょうど、五十有八歳であつたのである。そしてその年の十月二十五日、神禾原の大善導闍梨域内に陪窆され、靈塔を崇ぐ

されたのである。その時の道俗は嘆き、路にまであふれ、それらを制止できない人々が非常に大勢いたのである。そこで門人の思頊等が、(浄業)法師の舊い書簡を探しだして、その中より美しいものを拾い遺して、永く(浄業)法師の風軌を賛たえ、その前跡を思い崇がめて、そしてあえて粗末な石に彫り遺したのであるといふのである。

そして最後にこの牌銘は、開元十二年甲子の歳(七二四)の六月十五日、つまり浄業法師の二十三回忌の祥月祥当の命日に建てられたといふのである。

五、

以上のように、『大唐龍興大徳香積寺主浄業法師靈塔銘並序』を自分ながらに解説したわけであるが、そこでいくつかの問題点が生じてきたのである。

第一に読み方として、注目しなければならぬところは、本文の十八行目の

陪窆于神禾原大善導闍梨域内崇靈塔也

というところの読み方である。このところは、『大唐實際寺故寺主懷懽法勅贈隆闍大法師碑銘並序』にも

爰思宅兆、式建墳塋、遂於鳳城南神和原、崇靈塔也。

という同じようなところがあり、関連させて考察しなければならない。

このことについて、常盤大定博士の『支那仏教史蹟』第一(一〇二頁)・『支那仏教の研究』第一(四六八頁)において、

延和元年（七一二）念仏しつつ滅を告げ、その年に神禾原の大善導闍梨の域内に陪窆し、靈塔を崇くすとある。と、述べている。こうした読み方をする学者は牧田諦亮博士や、金子寛哉先生らである。

しかし、望月信享博士の『中国浄土教理史』（二五〇頁）には、

浄業は諱を象といひ、延和元年（七一二）六月端坐瞪視して念仏し、年五十八を以て寂し、その年十月、神禾原大善導闍梨域内崇靈塔に陪窆した

と、記してある。また、塚本善隆著作集第四卷『中国浄土教史の研究』の第二の『中国浄土教の発展』には、

七一二年に端坐念仏して寂し、善導の墓すなわち神和原崇靈塔に陪葬された。

とされているのである。このほか、佐藤成順教授は、『金石文にしのお善導大師像』（『日中浄土』第三号）において、さらに他の多くの学者は、善導大師一三〇〇年遠忌のとき、

神禾原の大善導闍梨の域内の崇靈塔に陪窆するなり。

と、読まれているのである。

さらに藤田宏達博士は、『善導』（『人類の知的遺産』第十八）において、隆闍法師碑のところでは、

弟子の懷憚は善導の死をいたみ、墳墓を建てるためのよい場所を選び、遂に長安の南の神禾原に靈塔を崇し、その塔のそば伽藍を構え、……

と言いながら、

善導の靈塔（一般に崇靈塔とよんでいる。）

とも言われているのである。

このように、隆闡法師碑と浄業法師のここの読み方によつて、霊塔を崇す、あるいは崇霊塔の問題が生じ善導大師一三〇〇年遠忌当時、崇霊塔という呼び名が固定化してしまつたと思われる。

崇の字自体の意味は、ここでは「たてる」とか、「たかくする」とか、さらに、「つちもりをしてたかくする」と、解釈すべきであつて、日本語的な崇霊塔の意味ではないと思うのである。

よつて、

神禾原の大善導闍梨域内に陪窆し、霊塔を崇くするなり。

と訓読し、その文意は

神禾原の大善導闍梨域内に陪窆され、霊塔を崇くされた。

ととり、意味的には、

浄業法師は、六月十五日に、念仏をして入滅されたのである。ちようど、五十有八歳であつたのである。そして

その年の十月二十五日、神禾原の大善導闍梨域内に陪葬された。

と解釈すべきである。

第二の問題点は、浄業と善導の関係である。すなわち浄業が善導の直弟子か、否かの問題である。金子寛哉先生も指摘されているが、常盤大定博士は『支那仏教史蹟』第一（二〇二頁）・『支那仏教の研究』第一（四六八頁）において、

浄業が懐感懐惇と共に、浄土教の大成者善導の弟子であつたを知る。

と言われ、また岩井大慧博士の『善導伝の一考察』（『日支仏教史論攷』一六七頁）において、

善導の弟子にして、その寂後も、善導の徳を思慕し、自らも善導の瘞域に埋葬されんことを願つた。と言われ、さらに松本文三郎博士も、『善導大師の伝記とその時代』（浄宗会編『善導大師の研究』五一頁）において、

浄業の入滅は善導より約三十年、懷憚より約十年の後であるが、おそらく彼も善導入室の弟子であつたろう。と、浄業が善導大師の弟子とされているのである。

しかし、この問題に対して、塚本善隆博士は『唐慈恩寺善導禪師塔碑考』において

彼（浄業）は或は善導の直弟ではなかつたであらうが、少なくとも懷憚と密接な関係があり、且善導の教に帰依し、其芳触に私淑した人であつて、……

と言われているのである。

この問題は實際、浄業法師の生没年時を、碑文より解釈からすればよいわけである。すなわち、浄業法師は延和元年（七一二）、龍集壬子の年の夏六月十五日に、念仏をしながら入滅されたのである。ちようど、五十有八歳であつたと記していることから、六五五年（永徽六年）の生まれとなる。そして善導の生没年時は、『新修往生伝』の説によると、六一三年（隋の大業九年）生れで、六八一年（唐の永隆二年）に六十九歳で入滅されたのである。しかし、ここで問題となるのは、浄業法師の出家の年時である。

高宗忌辰、方階落彩、被緇七日、旋登法座、觀經・疑論、剖析玄微、念定生因、抑揚理要。

あるように、高宗の忌辰すなわち六八三（弘道元年）に、浄業は二十八歳で出家したことになる。しかし、前に述べたように、善導は六八一年に亡くなつてゐることによつて、浄業は善導が入滅して二年後に出家したことになる。す

なわち、碑文からすると塚本善隆博士のいうとおり、浄業は善導の直弟子ではないことになるのである。

しかし、浄業は亡くなって、その年の十月二十五日、神禾原の大善導闍梨域内に陪葬されたことより察すれば、浄業は二十八歳で出家したが、それ以前に善導の教えを請うていたかもしれない、或いは二十八歳以前に出家し、善導の教えを請うていたことなども考えられるかもしれない。いずれにしても、浄業と善導とは、直弟子ではないが、善導を敬慕する浄土教者であることは、明確である。

以上、述べてきたように、善導を中心に浄業法師碑をはじめ隆闍法師碑、龍門の大盧舎那仏像銘などを見ていくのではなく、それぞれの碑文そのもの、すなわちここでは、浄業法師の碑銘全体に注目すべきではないかと思われる。そうすれば、浄業法師自身もつと明らかになるだろうし、善導と浄業の関係、懐惓と浄業の関係などの問題にたいしても貴重な史料となるのではないかと思われるのである。

(なお、この研究には、昭和六十三年度浄土宗奨学会特別研究費を助成された)

(以上)